

菜の花のよう

著者 佐藤廣枝



菜の花のよう

私は菜の花が大好き

誰にでも惜しみなく笑顔を振りまいてくれる

小さい可愛い花だけど

みんなで心つないで大自然の中

太陽の日差しを浴びて咲き誇る

いっぱい いっぱい実をつけて

大地に広がる菜の花畠は

感動と夢を与えてくれる

一粒万倍とは菜の花のことよ

母が教えてくれた

私もこの大地に生きる命を菜の花のよう

みんなと仲良く手をつなぎ

心重ねて命の花を咲かせたい

目次

まえがき 4

第一章 大切な家族 6

第二章 暖かい気持ち 41

第三章 生まれ育つた広島 70

第四章 母の言葉 95

第五章 私の人生 113

第六章 四十八句集 139

あとがき 161

まえがき

私がこの本を出すきっかけになつたのは、私の尊敬するオーストラリア シドニー在住の絵本作家「森本順子先生」のおかげです。

あれは2008年被爆者地球一周証言航海の長い旅。130日の間で出会い、同じ班になり、活動を共にする中で築いた信頼関係が始まりでした。文字嫌いの私にパソコンを教えてください、メール等、文字に触れることを教えてくださいました。

「あんたの言葉は消さないで残しておきなさい。」言われるままに全部ではありませんが、一部残しておきました。それを孫が見て、ばあちゃんの言葉は私にもわかるよ。そう言つて積極的に編集構成までしてくれました。「電通大3回生の7番目の孫」中国 北京へ一年間留学していて、一年ぶりに見舞に来てくれ、励ましてくれました。

私の言葉が孫の心に伝わる、それは驚きでした。その上、「編集してこれを2人の思い出に出版しよう。3月までなら広島にいるから。」と言う。照れくさくも、恥ずかしさもありましたが、手作りで孫との共作。こんな機会をいただくのも、縁。きっとこれも天からの贈り物、いやご褒美かとも思いました。

原爆、二度の台風、戦後生きるために北海道中標津の酪農農家へ3年4ヶ月、帰広（広島へ帰ること）してから学歴のない私は就職試験すら受けられませんでした。自分にできることを探し、自力で自営するしかありません。それでもいろんなことを経験し、負けないで、根性一つで自分の信じる道をひたすら歩いてきました。

今5人の子宝に恵まれ、21人の孫、ひ孫が1人生まれ、大家族の中で好きなボランティアをしています。そこで仲間の人たちや、平和公園に来る学生たちや、ホテルや学校に出前講演に出向き、子供に被爆者の一人として真実を語り継ぐことを使命としています。また、子供たちに囲まれる幸せもかみしめています。この作品は私の人生でもあります。一つでも共感していただければ幸いです。

この本を編集してくれた孫は私の7番目の孫で菜笑と言います。息子が一度限りの人生を皆の中で笑つて生きるようになると願いを込めて名付けました。私の17番目の孫も女の子です。娘婿がお兄さんにあやかり、菜々美と名付けました。そこで私の大好きな菜の花にちなんで、題名を「菜の花のよう」に」としました。

佐藤 廣枝

第一章 大切な家族

師匠

桜並木を散歩していた

つまづいてふりかえると

桜の老木が朽ちていた

皮の残つた部分に若草が風に揺れて

私達は生きてるよ

と私を呼び止めた

しゃがみこむとわずかに形を残す幹

無数の穴が開いて

虫たちが元気に動いてる

私は思わずご苦労さん

春には爛漫と咲き誇り

夢や希望を与えてくれた

夏はさつそうと茂り

日差しから守ってくれた

秋の紅葉は使命を果たした

喜びに燃えていた

冬は花芽をしつかり抱いて
風雪に耐えていた

何度繰り返したことだろう

朽ち果てた今も

新たな命をはぐくんでいる

お前は私の師匠だねありがとう

手を合わせると

なき母の顔が笑つてた



炭追い

今思い出しました

母と2人で

台風に襲われ実りのない秋を迎えた時
炭やまきを山から背負つて

駄賃稼ぎをした時を

おいこを背負つて山に登るの

道のない斜面を

誰かが付けた足跡を頼りに

右足に力を入れて体重をかけたら

左足を前に出すの

左に体重をかけたら右足を

交互に体重を乗せながら登るの

荷物を背負つて下りるときの

力を残しておくために

そして自分の体重ぐらいの荷物を背負つて山から下りる
足ががくがくふるえる

横向きで一步ずつ踏みしめながら降りる

間違えば谷底まで転げ落ちる

命がけだつた

生きるということは

我慢すること 絶えること

辛抱する木に花が咲く

そう言われて頑張つた昔

澄み切つた秋空に白い雲がなびく

木立が風に歌うやさしいせせらぎ
苦しい重労働の中

つらいとは思わなかつたのは
なぜだろう

今懐かしく思い出す



母の歌声

あれは田植えが終わり 緑の風邪が爽やかな初夏

学校から帰ると庭先で母の歌声が聞こえた

なんと澄んだきれいな声 美しい旋律

ただいまの声が出ない そ一つと縁側に近づく

天然の美の1番を

針仕事しながら繰り返し歌つて

なんと美しい詩 なんときれいな優しい声

私温かく包んでくれる

貧しい農家の中で 心満たされたひと時

今 思い出しても

ほのぼのと暖かく聞こえてくる

「空にささずる鳥の声 峰より落ちる滝の音」

胸が熱くなぜか涙がこぼれ落ちる

甘えん坊の私

あのね 私甘えてみたい

そんな気持ちになることがあるの

遠い昔 陽のあたる縁側で

お母さんの膝枕で 頭をなでてもらいながら

お昼寝したことがあるの

白い雲が流れ

ひまわりが子守唄を歌つてくれた

この年になつても

お母さんの膝枕で眠りたい

童心に返り 甘えてみたい

おかしいでしよう

母が歌う天然の美が

今夜は夢の中で甘えよう



母の夢

夕べ久しぶりに母の夢を見ました

いくつになつても母を慕う気持ちちはね

幼い頃と同じです

確かに自分が一人前になつたと思い

口答えしたこともあつたのに

昨夜 夢に出た母は お気に入りの矢絣の着物を着て

お座りをして優しく笑いかけてくれた

思わず お母ちゃんと叫ぶ

お母ちゃん お母ちゃん・・・

自分の声で目が覚めた

誰もいない一人の部屋で窓のカーテンがかすかに揺れた
なんとなくセンチメンタルになる今朝の目覚め
一言何か言つてほしかつた

思い出

あれは原爆が投下された翌年

6月に妹が生まれた

産後のお手伝いさんが帰ると

長女の私は忙しくなる

友達が泳ぎにさそつてくれた

私が出かけようとする

母に呼び止められた

おしめを洗つてから行きなさい

しぶしぶと友達を見送る

庭のコスモも悲しげに風に揺ていた



心残り

14歳のとき

北海道の母の妹に預けられたの

それは中学3年生の12月

急行安芸で大阪へ

大阪で日本海に乗り換え

青森 函館

青函連絡船に乗り

釧路へ狩勝峠で

じやじやぽつぽ

じやじやぽつぽ

黒い煙をはく機関車が

前と後ろでうなつてた

釧路から標津線に乗り換え

中標津に着いた



なんと8日間の長旅

ついた中標津は別世界

そこで3年4ヶ月鍛えてもらつた

そのおかげで今の私がある

帰り際 子供のいない叔母は

私にすがりつくようにして

「1度でいいからお母さんと呼んでくれないか」

世界中で母と呼べるのは一人しかおらん

懇願する叔母を振り切り北海道を後にした

すべてが雪にとざされた4月の事

今も馬櫂に手をかけて

追いすがる叔母の顔が涙を誘う

兄

私はお兄ちゃんが大好きだつた
私と6歳も離れてたの

ハンサムでね 優しくつてね

おうちの仕事を手伝つてゐるときはね
とつても頼もしかつたのよ

私はね いつも兄を自慢して

大きくなつたらお兄ちゃんのお嫁さんになるの
そういうつて仲良しの康子ちゃんを
兄に近付けないようにしていた
そんなお兄ちゃんが私が小学校の1年になつたとき
学徒動員で原爆の犠牲になつたの
遺品もお骨も何一つ残さず
もちろん別れの言葉も

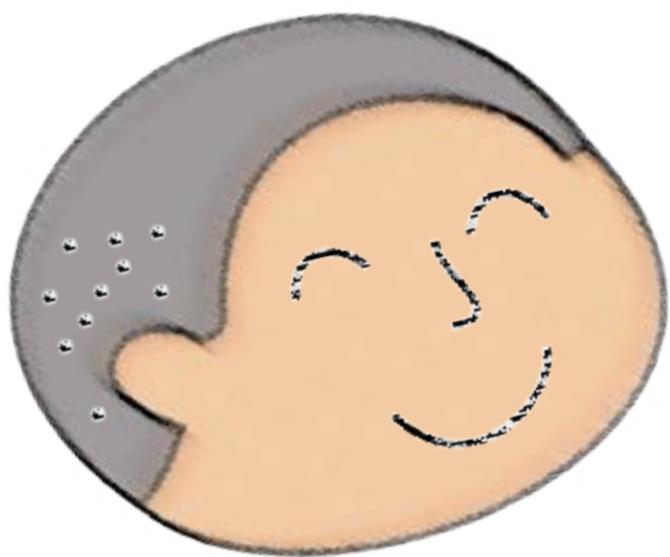
でもね 今も思い出すお兄ちゃんは

丸坊主の中学1年生のまま

優しい笑顔で広枝ちゃんと呼んでくれるの
声が聞こえるの

するとね 一滴の涙がこぼれるのよ

75歳の今もお兄ちゃんに甘えたい私



妹

私には妹が二人いる 一人は5才離れてる
一寸テンポが遅く

おのろさんというあだ名がついていた
その言葉が嫌いで

年下の妹に言われても 泣き出してしまう
食事は特に時間がかかる

夕ご飯は途中で居眠りを始める

あつと大声を出すと目をまん丸にあける
また居眠りを始める「こくりこくり」と

コラとしかられるとベソをかく

それが皆の笑いを呼ぶ 本人は眠たいばかり
私はそつと 抱きかかえておふとんへ
外でふくろうが鳴いていた



妹

8つ年下の妹は

一人で留守番が出来るようになつていた
遊び道具のない時代

母が座布団を丸めて このお人形をお守りしていてね
妹の背中に腰ひもで背負わせる

うなずいてにつこり笑うかわいい妹
皆で畠に出かける

夕飯のとき もう下ろしてあげなさい
妹は首を振る

私が紐を解こうとするとベソをかく
わかつたよとつこり笑う

皆も笑う 庭のお月様も笑つてた



弟

私の弟は2歳違い 同じ環境で育ち 同じ被爆者
なのに50歳後半にがんに侵された
子供が7人もいて 末っ子は幼稚園
治療しても手おくれ すぐに放射線治療が始める
弟はショックで気力をなくし 死にたい病がついた
私は必死に励ました

皆が力を貸すから体を治すことだけ考えて
私達はどちらが先にお迎えが来ても一生懸命生き抜いて
お母さんただいま そう言おう
大好きなお母さんからいたいた命大事にしよう
弟はうなずいて3年間頑張り 60歳で還つた
私は今75歳 今年13回忌を済ませた
お墓のそばの彼岸花が優しく微笑んでくれた

お彼岸

目の前のカレンダー

9月「23」の赤い文字

お彼岸の中日

白いベッドの上でお座りをして手を合わす
原爆で大好きな兄を亡くしてから

父母 弟 友人 恩師 大切な人

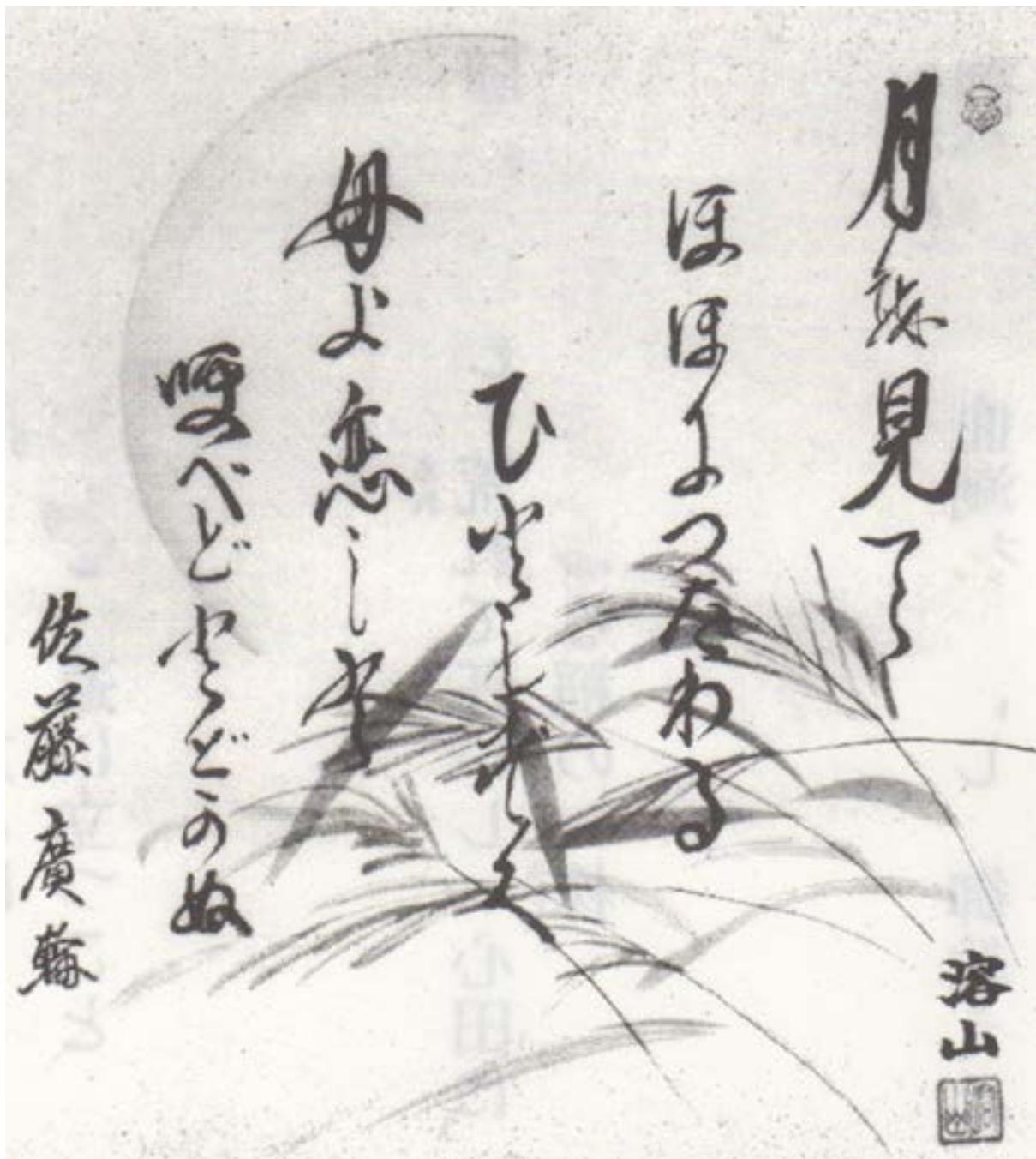
沢山の人を、おみくりした

頭の中を回り灯籠のようになくなつた方々の顔

思い出が限りなく回る

75年 生かされている歴史の中で





初めてのお産

私始めてのお産を迎えたとき
母が付き添つてくれたの

私の苦しむ顔を覗き込みながら
まだまだと言い川を見に行きました
すぐに帰つてきて

今ね引き潮だからまだまだ時間がかかるよ
おうちに帰つてくるからな

母は病室から出て行つた

母が帰つて30分後

陣痛がひどくなり

分娩部室に連れて行かれた
母がいない 不安が襲う

痛みが激しくなる

先生の声 看護師さんの声
助産師さんがお腹をおさえる
言われるまま力を振り絞つた
産声が聞こえた

元気な男の子と聞かされホッとする
わが子を見たとき

痛みはすべて飛んでいつた
しかしさ母への恨みは残つた
病室へ帰りわが子を手にした時
言葉では言い尽くせない感動と喜び
母が駆けつけたとき

最高の笑顔で孫を抱き上げてくれた
小言もうらみもどこかへとんでいつた
8月の暑い日の昼下がり

長男の結婚

私に5人の子供がいる

長女 長男 次男 次女 三男

男が3人 女が2人

結婚はもちろん順番ではないですね

長女のところ 次男のところ

次々と子供が生まれた

それに刺激され

結婚を意識したのは

30歳を過ぎていた

我が家では長男が一番最後に結婚した

他の姉弟のところに

続々と子宝が授かる中

羨ましそうに見ては祝儀を運んでいた

そんな姿が私には

不憫でもあり 愛しくもあつた

でも結婚しない宣言をしていた息子が

結婚してくれた時は

本当にうれしかつた

最後の結婚式を挙げたとき

安堵した気持ちも手伝つて

どれほど感激したか

何倍もの熱い涙を流した

親の責任を果たせた喜びが重なり合つて
すべてがバラ色に輝いて見えた



長男に子宝が授かった日

あれは今から20年前

桜の花が咲くころ

長男のところに子どもが生まれた
急いでお嫁さんの母親と駆け付けた
元気で真っ赤な少し小さい赤ちゃんだつた
皆で喜びを分かち合い

笑い声をこだまさせた

夕方もう一度差し入れをもつて見舞つてみると
なんと膝の上に赤ん坊を抱いて
じつと我が子の顔を見つめている息子
すると嫁さんが

お母さんもう2時間もこうしているんです と言う

本当におめでとう
それ以上の言葉は出なかつた
まるで宝物を大事に抱え
周りの景色が見えないほど
顔を見つめ

小さな表情にうなずいている姿

父親の愛情があふれてた

言葉少なに病院を出ると

日は暮れ

祝うように

星がキラキラ輝いていた



初めての子供への名付

ある日息子が真剣な顔をして

子供の名前は

親が最初にしてあげられるプレゼントですよね

私はそうねとうなずいた

すると息子が錦帯橋の桜を見てきた

確かに見事だつたけど

人生は一度限りだよね

一度限りの人生を

僕には裾に広がる菜の花が印象的だつた

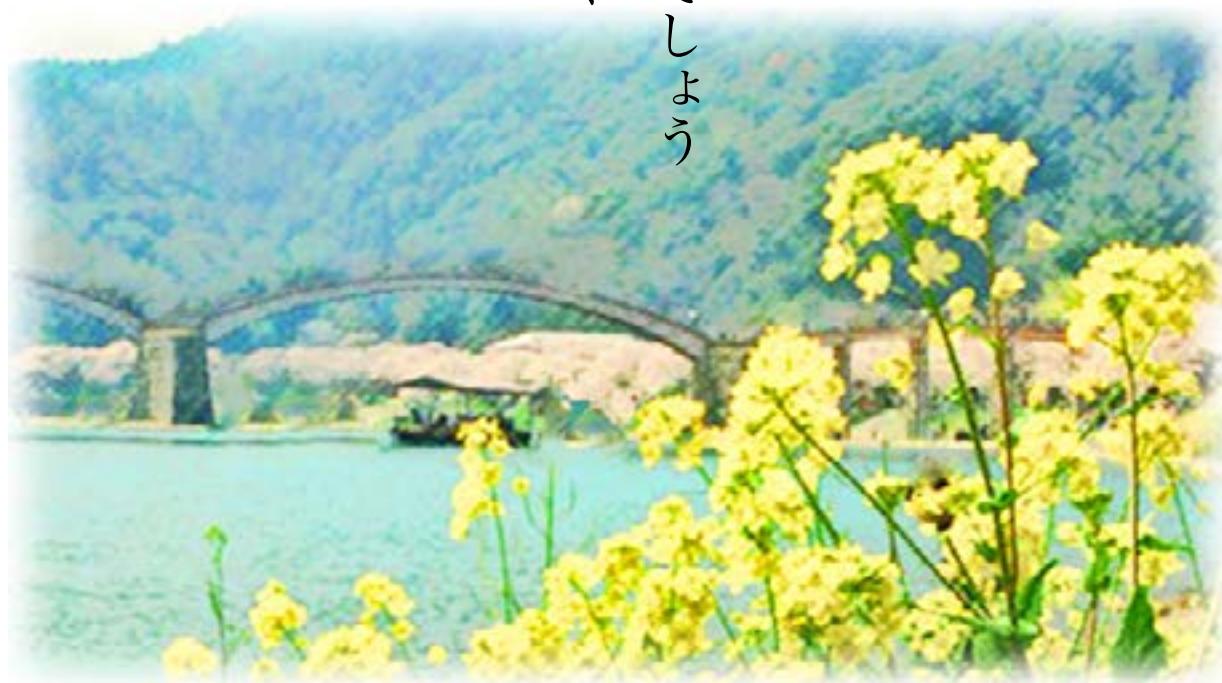
人生は一度限りだよね

一度限りの人生を

菜の花のように群れの中で咲いてほしい

人の中で笑顔で生き抜いてほしい

名前は「菜笑」と決めた



私は息子に共感したが
菜の花は弱々しいと
周りから聞こえた
しかし頑として聞き入れず
お母さんにとって
7番目の孫ですよね
それにちなんでもいい名前でしよう
得意げな顔をして届けに行く
息子の後ろ姿は
春の日差しにまぶしくも
頬もしくも見えた

初孫の誕生

忘れもしない

夏真っ盛りの暑い日

1988年8月8日

初孫の誕生

知らせを受けて駆け付けた
まさに赤ちゃん

真っ赤な元気な男の子
胸にこみ上げる喜び

涙が止まらない

我が子を抱きしめお乳を飲ませる
母親になつた娘と孫

8月の太陽に眩しく輝いていた



夢

あなたはどんな夢を追いますか

私はね

子供が5人いるの

孫はね21人

ひ孫は1人8月に生まれたの

こんなに沢山いるとね

私の年金では何にも出来ないの

お年玉だつて上げられない

今はねそんなこと全部あきらめて

私の生きた足跡を残すと決めたの

それは一生懸命生きて生き抜いて

皆に平等の思い出を残すために

愛の賛歌

あなたはどれだけの人に愛された
私は愛されて大きくなつた
おじいちゃん おばあちゃん
お父さん お母さん お兄ちゃん
可愛いがられて愛されて
私は優しい子になつた
弟妹だつて お友達も
みんな仲良くすることを教えられた
愛されて愛しているうちに
いつか母になる

我が子を手のひらに抱いた時
大きな大きな無償の愛を知りました
命に代えても守りたい我が子

目に入れても痛くないほど愛しい孫とひ孫
今はみんなには届かない
それでも送り続ける愛がある

頑張れコールを送る愛
私の願いはただ一つ
母の言葉を守るだけ

人の為に生きる事が我が喜びになる
真の愛に生きてくれ

私は誓う

人を愛する賛歌を
命を尊ぶ賛歌を
平和を愛する賛歌を
命の限り歌い続ける

愛しい孫

私には孫が21人いるの
いとこ似つて 知つてますか

本當によく似てるんですよ

21人も孫がいるとね

本当にとまどう

でもね みんなかわいいの

大学生になると不思議

女の子は母親に

男の子は父親に

声まで似てくるの

電話の声はいつも迷う

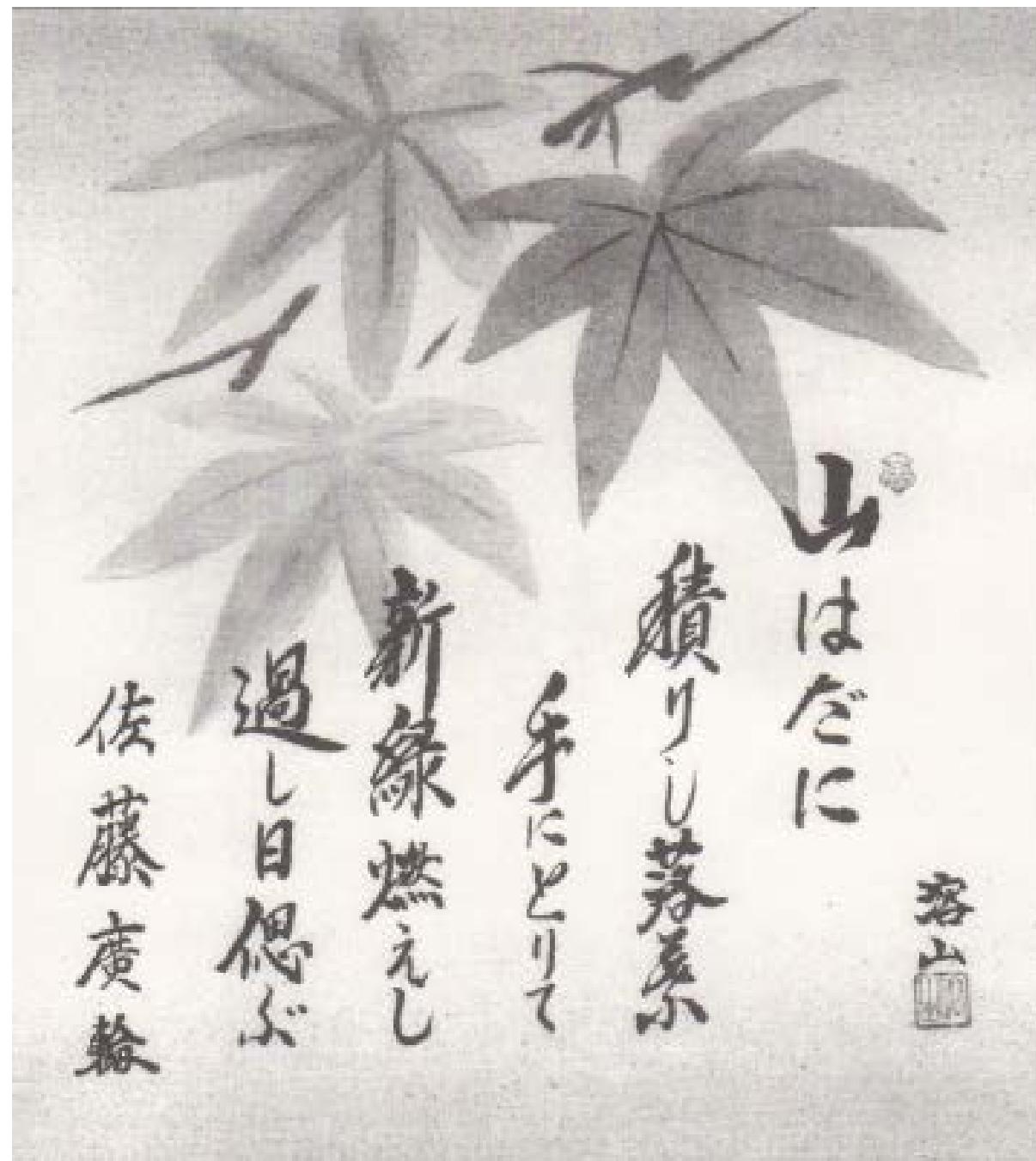
そのたび笑われたりするけれど

声変わりするほど成長してくれて嬉しい

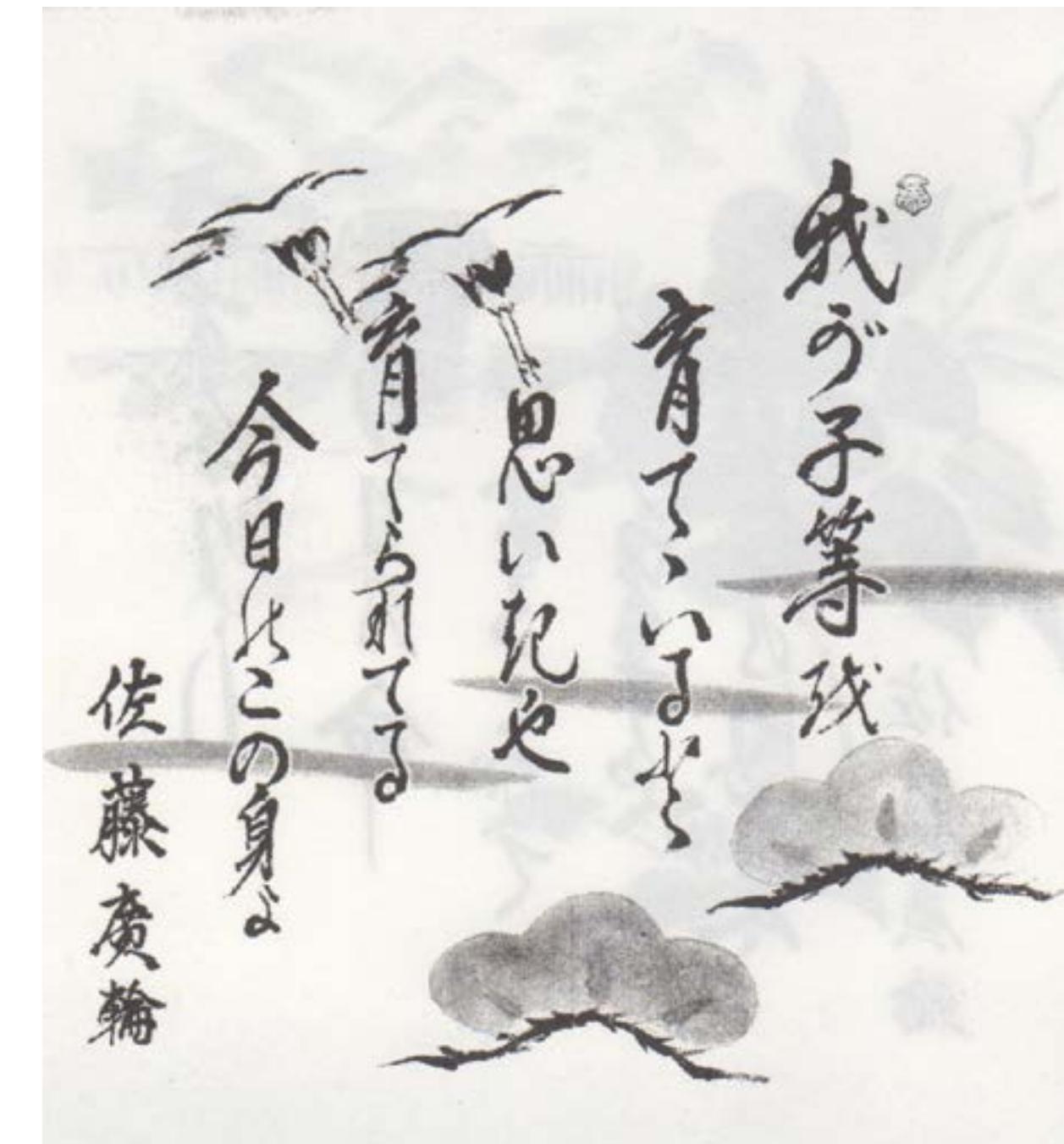
お父さんそつくり
お母さんそつくり
健やかに 健やかに
見上げる青い空

ポカリと浮かぶ雲に孫の顔が重なる
我が人生に悔いはない
頬をなでる風が歌つてくれる



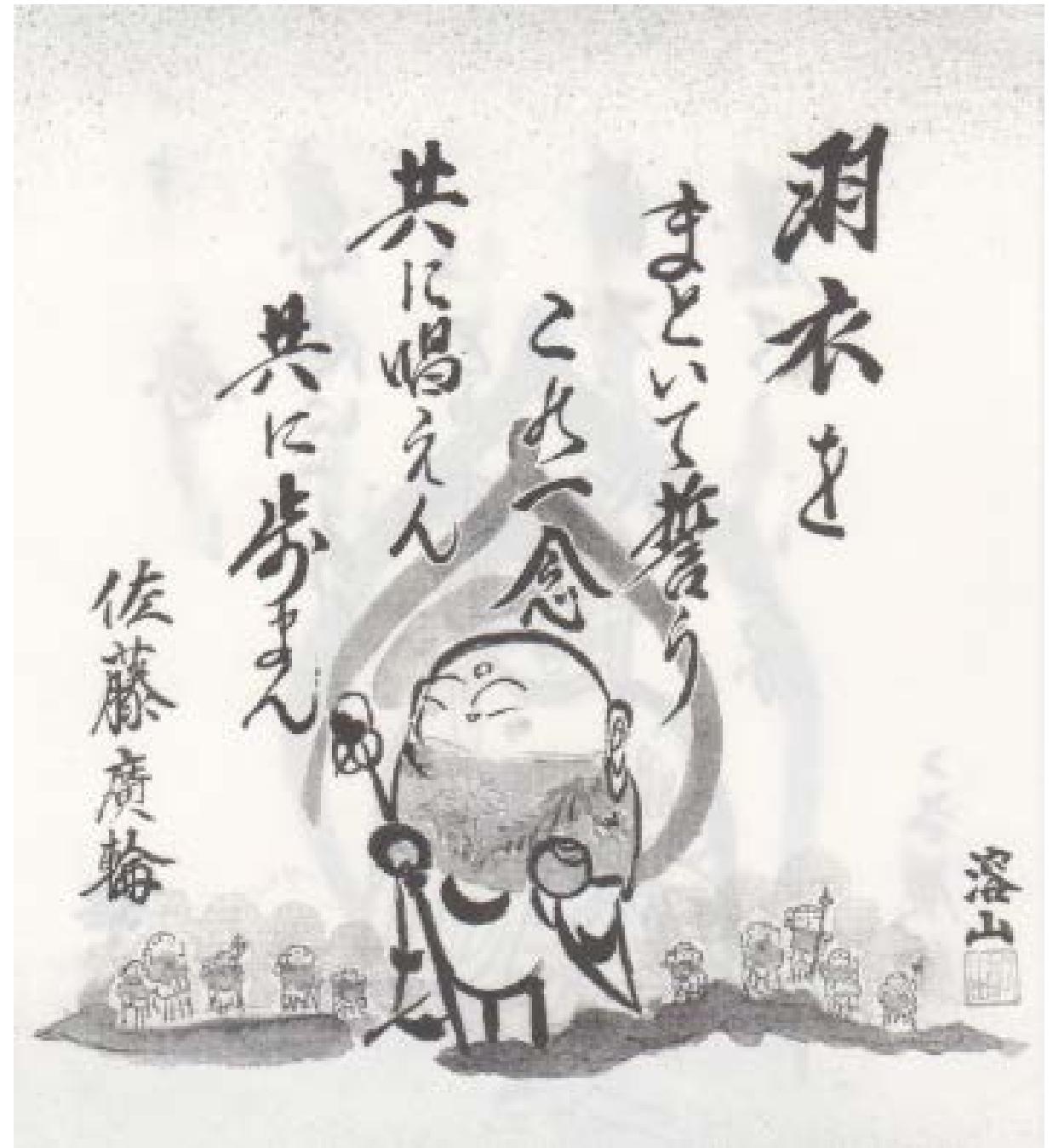


41



40

第二章 暖かい気持ち



実らなかつた初恋

初恋は不思議なものですね

周りの景色をすべて消す 一人しか見えないの

見えるのは あなただけ

一人の時は息をするのも苦しいほどに
会いたい おそばに行きたい

知らず知らずに叫んでる

胸ののときめきは 機関車みたい
張り裂けそうに苦しくて震えてた

会えば言葉も出ないのに

遠くから見ているだけでときめくの
実らなかつた私の初恋

遠い昔のことだけど 思い出は愛おしい

憧れ

私ね18歳の乙女の頃

初めて心を奪われた人がいたの
それはね

看護学校の倫理の先生

話される言葉がじんじん心にしみて
笑顔もしぐさも女性らしくつてね

本当にしひれちゃつた

私もあんな素敵な女性になりたい
憧れたわー

真つ赤に染まるもみじに

あのときの先生の顔が見える

青い空を見上げる 思い出は暖かい

小春日和の昼下がり



19歳の思い出

私ね19歳のとき

1つ年下の大学生に惚れられたの
私がバスガールをしていた時

毎日変わる私の路線を知つていてね
乗り込んできて 一番後ろの席に座つて降りないの
ただじつと私を見ているだけ

聞けば 私をかわいがつてくださつた
島のおばさんの親戚とか

私がお墓参りに行つたとき見掛け
所在を聞いてバス停で待つてたの
私のバスに出会うまで何時間待つたのだろう
そうまでして乗つてきたこと

後で話を聞いてびつくり

なんども何度も繰り返しているうちに 私は家に誘つた
母に島のおばさんの親戚と話すと
母は丁寧に迎え夕食まで支度してくれた
バス停まで送る

初めて肩を並べて歩いた 別れに握手した
その手はびつしより汗で濡れていた
その感触は今も 手のひらに残つてゐる

母はあの人は良家のお坊ちゃん

お付き合いはダメですよ

言われなくともと思つたがハイと返事して
お別れの手紙を書いた

あれつきり別々の人生を歩いた

今お世話になつた人たちはいない

島へ行くこともない消息すら知らない
でも思い出すのはなぜだろう

初恋の味

私ね70歳を過ぎて素敵な人に出会ったの

年はね80歳くらい

私にないもの沢山持つてる人

尊敬したの

あこがれたわ

この人のお役に立ちたい

ほんの少しお手伝い出来たとき

本当にうれしかつた

まるでね 遠い昔の

初恋の味みたい

胸のときめき

私ね75歳の今 胸のときめきを感じるの

まるで乙女の頃のように

憧れの人の笑顔が見たい

お役にたちたい

それだけが私の願い おかしいかしら

元気な声を聞くと嬉しいし

か細い声を聞くと涙がこぼれる

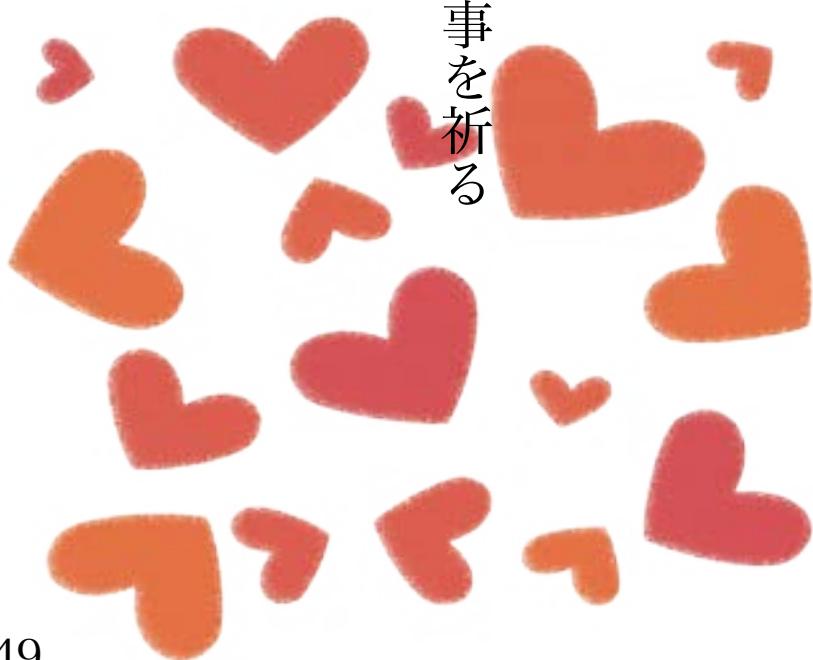
南半球に住む素敵な人

どうぞお元気でと北半球から無事を祈る

七夕さんに会えたらと・・・

はかない夢に望をつないで

白い雲に思いを乗せる



憧れが尊敬に

人は一生のうちに

何人尊敬できる人に出会えるのだろう

私にとつて一番尊敬できるのが母

大好きなのも母

誇りに思うのも母

狭い視野の中で生きてきた

小学校のとき疎開先で優しくしてくださった先生

子供ながらにあこがれた

それは母親に似た優しさで

今も私を見守つてくださる

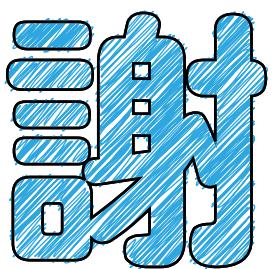
励ましてくださる先生は 今87歳 私は75歳

近くを通れば必ず立ち寄る

一人暮らしの先生はお茶だけでなく食事まで
私は出されるたびに いつも甘える
もちろん仕事でも応援してくださる
この世でただ一人甘えられる人

60数年のときを越え 童心の世界へさそう
先生どうぞお元氣で

目が覚めれば 祈つてゐる



友達

友達は素敵ね

何年振りの再会も
出会えば喜び抱き合つて
お料理だつておいしいわ
はずむこえ 笑い声

枕を並べて横になる

語り尽きない思い出話

西に傾くお月様

目を細めて 笑いつつ

明日があるよ お休みなさい
それでも疲れぬ旅の夜

春爛漫

春は誰にも夢を運んでくれる

卒業 旅立ち 入学 親も子も

咲き誇る桜見上げ

大地に広がる菜の花に

無限に広がる 夢 希望

甘い優しい桜吹雪

人生の幸せに酔いしれる



七十五歳のお月見

お月様ありがとう

心の中まで照らしてくれて

童心に返れば優しい気持ちになれたよ

金色の輝きに抱かれて夢の中

ウサギさんこんなに沢山お餅をついて

私が丸めてあげましょう

みんなにみんなにあげましょう



朝日昇れば

どんなに疲れて帰つても一夜眠れば
壁にかけたカレンダーの

赤いペンで記された文字が　日に映えて
今日の仕事はこれですよと呼びかける

窓を開けると秋風が

そーっと　背中を押して呉れる
大きく深呼吸をして外に出る

お隣さんのコスモスが

優しく微笑んで見送つてくれる

私は鼻歌を歌の

今日も一日頑張ろうと

ホオズキ

真つ赤な真つ赤なホオズキさん
なんとかわいらしいことでしよう
色艶よくて輝いて幸せそう

見つめる私の心も躍る
負けないように元気を出して

身も心も真つ赤に燃やし
浮かれて歌おう明日の歌を



夢

かわいいおばあちゃんになりたいな
鏡を見るたび思うの 顔にだんだん張りがなくなつてね
その分しわがふえるでしよう

整形している人もいるとか

私は自然のまま年を重ねたいの

金さん銀さんみたいに しわの数だけ笑顔に変えてね

子供たちからも愛されるような

かわいい優しいおばあちゃんになりたいの
たくさんの子供たちと触れ合つて

お迎えがきたら 地球上の生あるすべてに感謝をこめて

ありがとう ありがとう 手を振りながら

銀河の世界へ還りたい

お母さんただいま そう言つてね





弱虫退治

朝目覚め 太陽が昇れば
風に吹かれ 雨に打たれ 鳥の声を聴く
人さまとの出会い すべてに感謝しているの
生きてるつて感じるから

でもね 病に侵され 手足がしびれ
身体全身に痛みを感じるとね

弱虫さんが顔を出すの

出できちやだめ と叱るとね
頭を下げて 後ずさりするの
がんば がんば 頑張れ広枝 と私は歌うの
するとね窓から差し込む日差しが 優しく抱いてくれる
吹き込む風が一緒に歌つてくれる

小春日和ののどかな一日

雲の中で

10月6日の出来事

夜明け前4時ごろ

身体が痛くて泣き出しそうになつた
退院することが決まり

ニトロと痛み止めをもらつてたの
3度目の手術が一番ひどかつた
でもね痛み止めは我慢した
強いでしよう

そんな私が 空き腹では飲まないで
と言われた薬を飲んでしまつた
しばらくすると痛みが治まつてね

私は雲の中

痛みから解放され 身体中の力が抜け
どこかへ吸い込まれていく
うつすらと見える白い雲
目の前も 横を向いても
ふんわりとした白い雲
様々な模様を描きながら流れるの
心地良い まるで別世界
私はどこへ行く
たぶんそのまま眠つたのだろう
目が覚めると時計の針は6時をさしていた
痛みがとれ爽やかな気分

雲に乗つて憧れの人にでも会つてきたのかな
窓の外に現実を知らすカラスの鳴き声が聞こえた



青い空

澄みきつた

青い 青い

高い 高い

広い 広い

お空を見上げる

一つだけ ふんわり浮かぶ白い雲
ねえ 私 病に負けなかつたでしよう
お仕事頑張つたでしよう
ようやつた ようやつた
秋風が優しくなでてくれた
胸が熱くなる
頬に暖かい一滴

なぜ どうして涙がこぼれるの

信念の道

しつかりと大地を踏みしめてさあ歩く
一筋の希望の光を見つめて
信じる道をまっしぐら

雨も嵐もこの身で受ける
心の中まで入れない

真つ赤に燃える情熱の炎よ
ぶれない精神 耐え抜く信念
成功の夢を実現に変える

人に生まれた喜びをかみしめる

感動 欽喜 感涙の中生き抜くために

私は歩く一筋の道を残して



一生懸命

私はいつからこの言葉を覚えたのだろう
心の中を覗いてみた

一生懸命の文字が躍つてる

確かに運動会の朝 一生懸命走るのよ
うん とうなずいて一生懸命走つた

お勉強も 遊びも お手伝いも

一生懸命頑張ると大きな人になれるのよ
それからずっと一緒に笑つたり 励ました
今も私のそばにいてくれる

お前は人生の最大のパートナー

決意は私のコーチ

昔ね決心したと母に言つたの
母はニコニコ笑いながらこう言つたの
決心はね心で決めたことでしよう
人の心は変わるもの
しかしね

決意は変わらない
心に決めたことを

しつかり自分の足で立ち上がり

目を見開いて進んでいく

半紙と筆を持つてきて

決意と書かせてね

机の前に張つてくれた
以来決意は私のコーチ



天下無敵

こんな気持ちを抱いたことがありますか

私はあるの 自分が信じてやりたい そう決めたとき

天下無敵

矢でも鉄砲でも飛んで来い 負けてたまるか
我信じる道をがむしやらに突き進む

その時 夢と希望を膨らまし

成功したときの喜びを思い描くの
しかしこの熟語「天下無敵」は

自分のためには使えない

誰かのために役立ちたい そう決めたとき

限りない無限の力を發揮する

私は今でもそう信じてる





第二章 生まれ育つた広島

山

私は山が好き
四季折々の花を咲かせ
生きてることを実感させてくれる
山奥には山奥の味がある
大峰山のふもとの森林は
時間の流れを止める
清らかなせせらぎの音は
神秘の世界へ案内してくれる
命の洗濯が出来る
下山の道にはリンドウやキキョウ
私の好きな紫に出会える
年に一度はふるさとの山に行きたい



ふるさと

私のふるさとの一番高い山権現さん

どつかりと大地に腰掛けて村を見下ろす

夜明けとともに小鳥がさえずり ふもとで一番鳥が鳴く

朝日が昇る 家々からかまどの煙立ち上る

笑い声がこだまする 村は元気に動き出す

野道に聞こえるわらべ歌 通勤バスも軽やかに

太陽が真上に上がると 一瞬静かになる

学び舎から聞こえる鐘の音 山から木を切る音がする

西空を真っ赤に染めて日が沈む

カラスが鳴いてお山に帰る 一日が終わる

ふくろうが鳴いて夜が来る せせらぎの音色は子守唄

権現さんは景色を変える

春一番に梅が咲き 桜が咲いて こぶしの白い花

桃の花 山つつじ 山吹の花 菜の花 あやめが咲いて

小でまり 大でまり

夏はひまわり

秋は可憐なコスモス咲いて実りの秋

稻は黄金色にたなびいて 柿は色づき 栗は笑う

村の神社の笛太鼓 年に一度の秋祭り

神楽の舞は夜明けまで

権現さんが美しい紅葉に染まると

冬支度 落葉樹は丸裸

松と杉は緑を増して雪景色を鮮やかにする

まさに天然の美

権現さんに守られて

のどかなふるさとはお正月を迎える

棚田の田植え

あでやかな緑 よみがえる棚田

いそいそと春の日差しの中で耕す人々
泥だらけの汗のにおいがする

自然と人が調和して

働くも尊し 汗も尊し

食が命の私達

一粒のお米を噛みしめて

今生きる平和な世界に感謝を込める



情熱 「もみじ」

真つ赤に燃えるもみじ

すばらしい 美しい 言葉は尽きない

それは ほんのひと時 はかなくも思う

しかし人の情熱は

命ある限り消えることはない

ふるさとが好き 人が好き

明日に向かう情熱は

目的を見失わぬ限り

青春のときめき

めらめらと燃えつづける

私は今それを知る 75歳の秋



野いちご

原爆でね 田舎に疎開したの
お父さんの親戚の家

近くに 堤防があつたの
堤防の石の間から

野いちごが生えて

小さい小粒の野いちごが
いっぱい いっぱい実をつけて
私を誘う

おそるおそる手を出すと
おいしいよ食べてみんさい
真つ赤な顔で笑つてくれた
川風がほほをなでる

心地よい夏の昼下がり



青サギ

太田川防水路の土手を走ると
間隔をあけて青サギがぼーと立つてゐ
お前はのんびり屋なのか

根気がいいのか 私はアホサギとあだ名をつけた
車を止めて近付いてみた 逃げる気配もない



ところがどうして胸にオレンジの羽が生え
スタイルもよく美しい

潮が満ちると ふわりと飛び立つていつた
その美しさは鶴に等しい

私はその背中に乗せてと叫びたかつた
悠々と飛んでいくサギに手を振つた

西の空は夕焼けに染まつていた



初雪

子供の頃ね

疎開先で空一面に薄いねずみ色の雲が覆い
太陽が見えない冷え込むお昼時
きっと雪が降るよ

母が言う

さつさとご飯をかきこんで

外へ走り出す

弟も妹もついてきて 空を見上げる

時折ふんわり風に舞いながら

やわらかい雪が舞い始めた

私が上を向いて雪を口で受けると

弟妹たちは大はしゃぎ

口を開けて外庭を駆け回る

鼻や目に飛び込んでくる

貧しい農家の楽しい初雪

目を閉じると

汗をかきながら

ニコニコ笑う顔が見える

縁側に座り

「雪やこんこんと」歌つた

可愛い歌声も聞こえる

初雪は私を暖かく優しく抱いてくれる

60年前の思い出だけど

今も懐かしく幸せをつれてく

青い空

公園のベンチに腰掛けて
空を見上げる

川風が優しくほほをなでる
ふんわりと浮かぶ

白い雲

孫悟空が下界を見おろしているかな
はすの台座に似た雲
仏様がお座りしてゐる
お観音様に似た雲
お地蔵さんに似た雲
頭の上を西へ流れしていく

真つ青な空に
銀色の飛行機が東へ

白い飛行機雲が道をつけていく
私は自分に言い聞かせる

生かされている

生きている
信じる道をひたすらに

命ある限りと



ピカドン

ピカドンつて知つてる

そう それはね昔

広島に落とされた原子爆弾のことなの
本当に恐ろしい爆弾だつたのよ

ピカ

光はね稻妻の数百倍 誰も見たことのない光

ドーン

音はね大地が割れるような 誰も聞いた事のない音
熱線はね太陽に等しいとか

地上に降り注いだ熱は4000度と言われてるの
すごいでしょう

ビルからは一瞬にして火柱が立ち 街が燃えたの

数十万の命を奪つただけではないの

得体の知れない放射能はね

30キロも離れた所まで黒い雨を降らせ

無傷の人の命も奪つたの

そしてね 生き残つた人の心までずたずたにしたの
恐ろしいことでしょう

ビルを破壊し 家を壊し

人間も馬や牛や犬猫ねずみも
木も草も花も

空飛ぶ鳥も小さなありんこも命あるもの
すべてを焼き尽くし灰の町にした

恐ろしい1発の爆弾

これが ピカドン

小さな平和の天使たち

7月の末

私初めて保育園に呼ばれたの
原爆記念日がくるので

体験を話して

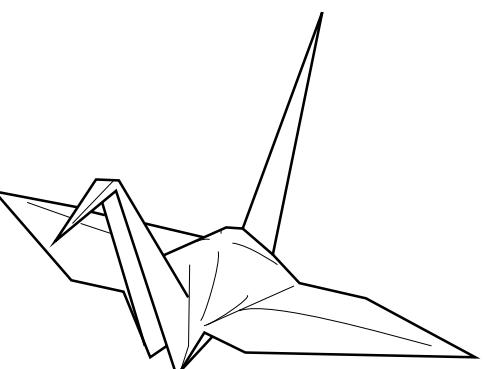
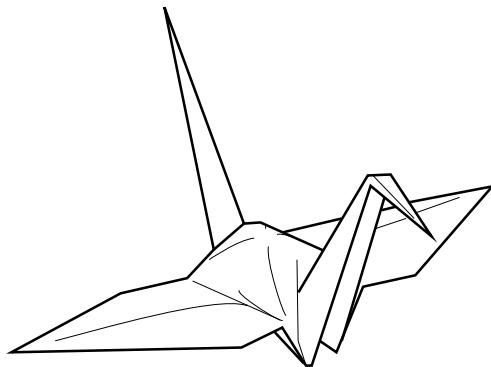
園長先生からの電話

少し不安だつたが引き受けた
たずねると

かわいい かわいい年長さん
26人の元気な声と

笑顔に迎えられた

どんな話し方を
とまどう私に
真剣なまなざしが飛び込んで
元気をもらつた
しつかり聞いて
しつかり質問する
あとで絵を描いてくれるという
書きあがつた絵を見てびっくり
すごい表現力
これぞまさしく平和の大天使さん



かけがえのない私の宝物

私は被爆者

被爆者だから与えられた使命がある
平和公園に訪れる子供たちに語りかける
戦争を知らない子供たちが
犠牲になつた御靈に折り鶴をささげ
手を合わす

言葉をつないで平和宣言をする
声たからかに平和の歌を歌う
感涙の中で私は言う

今の平和に感謝してね
命を下さつたご両親

お世話してくださる先生にも

感謝の気持ちは情熱に変わる
情熱は力なの

優しい気持ちで相手を思いやる
いたわりあう

そこから始まる平和な世界があるんだと
子供たちは目を輝かせ

大きな声で約束してくれる

これが本当の宝物

子供達の未来よ幸せであれ

この宝物は来世まで懐に抱いていく

平和公園

今日も観光バスが並んでる
世界中から集い来る人の波
世界遺産の原爆ドーム

ようきんさつたと出迎える

ここに眠る数十万の御靈　夾竹桃は語りだす
戦争はおろかなこと

核は無限に恐ろしいもの

69年たつた今も命を襲う
だけど忘れてはいけんよ

原爆は生き残つた人の心まで、ずたずたにした

広島の人たちは

犠牲になつた方々に祈りをささげ

涙を呞んで　苦渋の汗を流して復興に命をかけた



わずか数十年で平和国際文化都市を築いたよ
人間は強く　たくましい
そして生きることはすばらしい
悲しみに耐え　憎しみを乗り越え
人類に核廃絶と世界恒久平和実現のメッセージを送る
広島の心待つて帰つて
広島は素敵な街だと伝えてね

未来を担う子供たちへ「願い」

私は子供たちへ伝えたい

みんな顔が違うようにな

好きなことも 出来ることも

出来ないことも

それぞれ違つて みんな良い

だからね助け合えるの

いたわりあえる

大切なことはね

自分に出来ること好きなこと

一生懸命努力する

それでいいの

それがね 自分のため 社会のため

でも一つだけ

約束して欲しいことがある

尊い命は お父さん お母さんからの頂きもの
心のそこからね

ありがとう といつてみて

お父さん お母さんの

笑顔はあなたの力になるの
学校では 先生に お友達に

ありがとう といつてみて

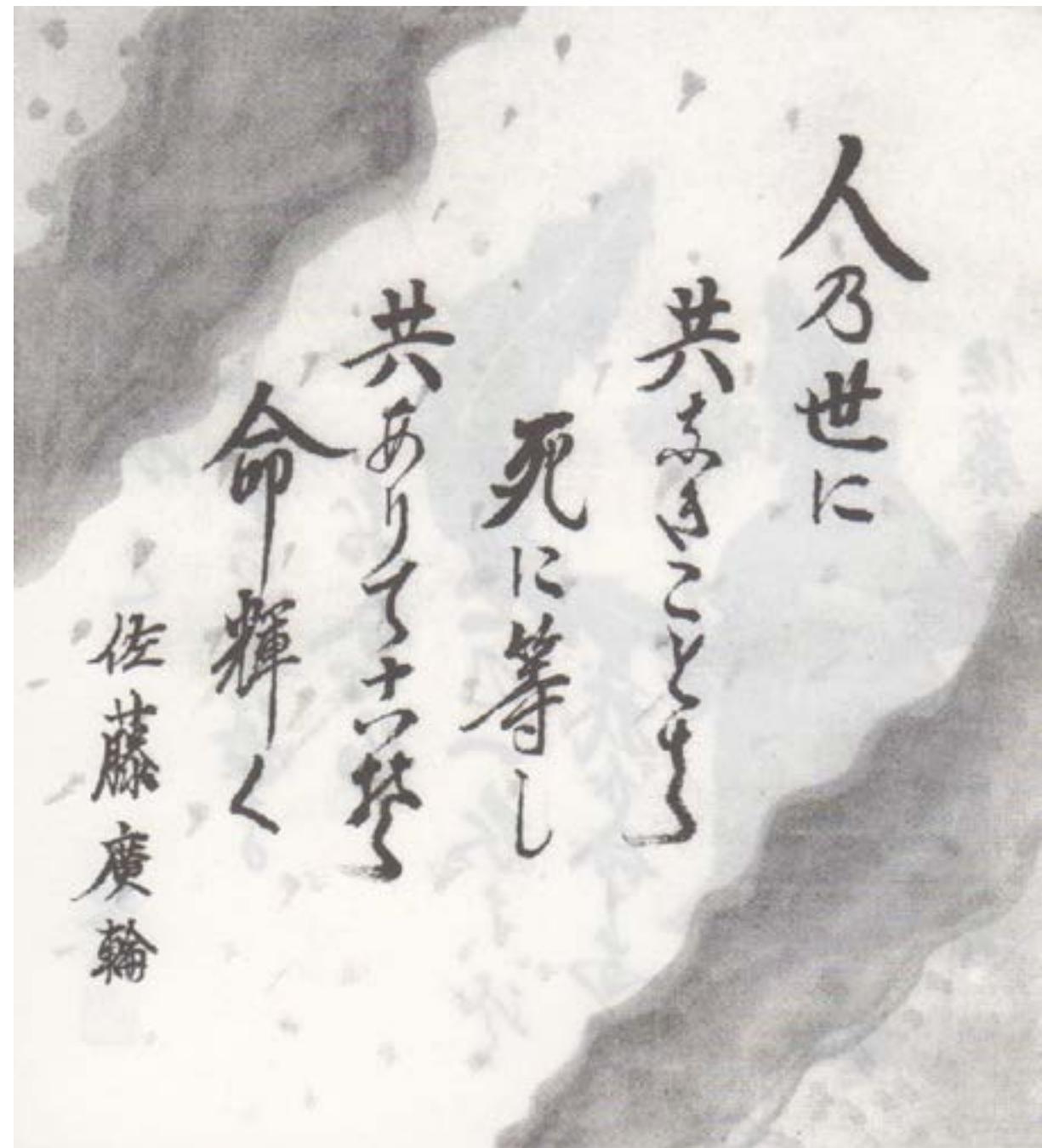
ありがとう は素敵な言葉

感謝の気持ちがわいてくる

その力でね 今日を楽しく生きてほしい
優しい気持ちでいたわりあう 支えあう

そこから始まる

平和な世界を築いてほしいの



第四章 母の言葉



頑張ろうね

原爆で焼け野原になつた場所を
何日も兄を探して歩き

材木町で兄の死を受け入れたときのこと
おうちが焼かれたことも

お兄ちゃんがなくなつたことも
おうちが焼かれたことも

心に残すと不平不満になる
不平不満は爪めの先に少しでも残すと

心に残すと不平不満になる
お前の顔が見れる 皆の顔も見れる
太陽が拝める

一寸先は真暗闇

でもね 奇跡に奇跡が重なつて生き残つた
生き残つたことを感謝しようね

お前の顔が見れる 皆の顔も見れる
太陽が拝める

あたりを見れば

感謝する事は山ほどある

感謝の気持ちは情熱に変わる
情熱は力に変わる

その力で生きていこうね

生きたくても生きることができず
無念の死を遂げた人たち

お兄ちゃんの分まで生きようね

頑張ろうね

それから77歳の生涯を送るあいだ

苦しい悲しいの言葉は使いませんでした

小学校の門前

広枝

この門をくぐると

お前はもう子供じやないのよ
小学生という学生になつたの
人様のお話が聞ける

お勉強もできる年になつたの
でも心配することはないよ

学校には先生がおられる

お家のお父さんお母さんの
代わりをして下さるのが先生なのよ
先生を好きになれば好きになるほど
先生のお話がよく聞こえるのよ

でも耳には穴が開いてるでしょう

右の耳で聞けば

左にスーと逃げる

右にスーと逃げる

でも両方の耳で聞けば

心にもうひとつ耳ができる

心の耳で聞いたことは忘れない

今度お母さんに会つたとき話してね



5年生の時

夕食後

縁側に肩を並べて座り

満天の星を眺めながら

広枝や この地球上に星の数ほど
いや数え切れない命の中で

言葉をもらつた人間に

生まれた事を感謝してね

愛を使い分ける事が出来る

知恵を使うことができるのはね

人間だけなの

命あるものの中で人間が最高なのよ

神様だつて 今度言葉を持つ人間に生まれたくつて

天国で修業しておられるかもしれないよ

おまえはその最高のところへ生まれてきた
私の体はそのとおりの道だつたのよ
いつかおまえが

親孝行したいと思つた時

周りの人にやさしくしてね

残念なことは

母の生前中

私はこの言葉の

本当の意味がわかりませんでした
今なんとなくわかる気がしています

人間は動物とは違う

ある日

野良猫がトカゲをとつてきて

目の前のなす畠で

首を縦に振りながら食べていた

気持ちが悪いので戸を閉めようとする

座りなさい よく見ておきなさい

食べ終わるまで見せられた

ねえ 食べるだけなら

野良ネコだつて食べていくの

人間に生まれたからには

食べるだけでは意味がない

多少なりとも

人さまのお役にたたなければね

人さまのお役に立つということはね
何かをさせてください

おまえがへりくだることではないよ
何かをしてあげた

おごつた気持でもないよ

今おまえにできることを

一生懸命努力する事

これがお前のため

家族のため

やがて社会のためになる

自由がお前への最高のプレゼント

新学期が始まつて

学校から帰つてくると

母が縁側に腰掛けて

私の帰りを待つていた

かばんを縁側に置かせ私の手を引いて

丘の栗林へ連れて行つた

広枝ここに大の字になつて寝てみなさい

言われるままに両手を広げ大の字に草原に寝た

若草の甘い香りを

優しい風が運ぶ

背中にポカポカ土の温かさが伝わる

新緑の栗の木の隙間から青い空が見える

太陽が私の全身に降り注ぐ

どうだ気持ちいいだろう
うん とうなずく

これが私がお前にあげる贈り物だよ

不思議な顔をする私の手を引っ張つて起こし言つた
あのな

本家のようにな

分限者に生まれてきたら

親からもらつた財産を

守るために心痛する

まかり間違つて皇室に生まれたら

箸の上げ下ろしも自由にならん

しかしおまえを縛るものは何もない
この自由が

私からの最高の贈り物だよ



3本の道

山の中で重たい炭を背負つて降りてくる途中
休憩場所で

広枝 ここから3本の道が見えるのだろう

1本はバス道 1本は里道 1本は獣道

今 おまえにどの道を歩いてもいいよ と言つたら
おまえはどの道を歩く

私はすかさずバス道と答えた

すると母は あれはね人さまがつけた道なのよ
おまえが目を皿のようにして歩いても
おまえに得るものはない

里道はどうだ

四季折々の草花が咲いて優しさをくれる
獣道に入つたらどうだろう

人さまが歩いたことのない道

一歩入れば千尋の谷があるかもしれない
たとえ落つこちても今のおまえなら
きつとよじ登つてくれるだろう

その奥に行くと 水晶の宝の山があるかもしれない
またその奥に行くと

山ユリが一輪咲いているかもしれない
おまえは何を感じるだろう

でもね山ユリはおまえに出会つたこときつと喜ぶよ
この獣道で体験することは
だれにも取られないおまえだけの宝だよ

母さんはね

勇気と冒険心を持つて獣道を歩く人になつてほしい
今この年でこの言葉の意味がわかる気がします

命輝くとき

本当に命が輝く時は

人の為に生きることが
自分の喜びになる時よ

今この言葉の意味がはつきりわからります
思い起こせば確かに子供のころ

お母さんが喜ぶ笑顔が私の喜び

弟妹の笑顔も私の喜び 生きがいでもあつた
好きな人ができた時

その人の役に立ちたい

結婚したら子供がほしい

子供が生まれたら

子供のために無償の愛も知つた

子供のため 孫のため

子供が生まれたら

そして今は

私の周りの未来を担う子供たちのため

何か自分にできることを追い求めながら
一つの願いが達成できた時

その喜びをバネにして

明日に向かつて頑張る

考えてみると 母は私の心の中に今も生きている

苦しい時も 悲しい時も うれしい時も
新しいことに踏み出す時も

いつも二人三脚そんな気がする

私は母にいたいたこの命

母の望んだ生きかた

教えをこの身に刻んで生き抜きたい
目を閉じるとき

母の懷へただいまと帰るために



第五章 私の人生



「頑張つて歌つて笑う人生」

父が好き 母が好き

弟が好き 妹が好き

山が好き 田んぼが好き

青い空が好き

小鳥がさえずる大自然が好き

一生懸命の私が大好き

頑張る私はもつと好き

朝が好き 朝日が好き

花が好き 道草が好き

小川が好き メダカが好き

力強く流れていく大川が好き

夜明けとともに働く人が好き

汗を流すわたしが大好き

明日を歌う私はもつと好き

先生が好き 友達が好き

学校が好き 遊びが好き

鐘の音が好き 静かな時が好き

さんさんと輝く太陽が好き

元気いっぱいの仲間が好き

笑顔で生きる私が大好き

夕陽を見送る私はもつと好き

北国の春

北国の春は神秘的

雪に閉ざされた白銀の世界

沢の南斜面に熊笹が揺れる

可愛い黄色の福寿草が顔を出す

小川にヤマメがちよろちよろと

クレソンの間から姿を見せる

雪が溶けて大地に目を吹く

葺きの塔が

丸るく丸く輪になつて

お手々つないで躍り出る

牧草畑が青々と草原に変わる

タンポポが咲きみだれ風に歌う

白樺芽吹き北国の美しき春

春駒元気に

お尻を跳ね上げ飛びはねる

母親 優しい目をして寄りそう

お馬の親子

本当に仲良子良し

お馬のいななき空に舞う

牧草畑に乳牛群れて喜びの声

モー

酪農農家は春一番に動き出す

酪農農家の思い出

酪農農家は自給自足

本当につらい日々だった

春雪解けを待つて 荒地の開墾が始まる
私が一人増えたことで農地を広げるため
から松の根っこを二頭引きの馬でほりおこす
熊笹を大雑把に刈り込ん

二頭引きの馬にすきを付け耕す

それをならす道具の名前は忘れたが
それに人が乗つて平らにしていく
荒れ地に最初にまくのはそば

白い花を咲かせ

いっぱい いっぱい 実をつけた

2年目の土地にはエンドウ豆を植えた

広い畑の草取りは

私にとつては泣きべそ仕事

そして3年以上の畑には

まず菜の花 菜種油の原料

ビート畑 これは砂糖大根とも言つて砂糖の原料

麦 家族用

燕麦 馬の飼料

かぶ 家族用と牛用

人参 家族用と家畜用

トウモロコシ 家族用と家畜用（デントコーン）

大根 ホウレン草 ジャガイモ 金時豆 おたふく豆

これらは家族用

かぼちゃ 家族用は金トンと言い

家畜用は馬鹿でつかくなる

おなかがすいて

月明りで大根を抜いて
菜つ葉で土を拭いて がじがじ
砂の音を立てながら食べた

その砂の音は今でも忘れない
しかし大根の甘みも

本当にいろんなことを体験した

40町歩が1軒

隣に行くにも馬

町の行くにも馬

冬は馬橇（ばそり）

雪が解ければ馬車

裸馬を乗りこなし

人馬一体とはよく言つたものだ

馬はくつわをかけて 道具を付けると
もう何をするかわかつてゐる

北国の日暮れは早い

特に冬は日の高さを常に見ていないと
日が落ちると我が家に帰るのも困難
家の明かりが見えたとしても

沢がある はまれば命がけ

1度だけ命からがらずぶぬれになつて
やつとの思いで家にたどりついたことがある
考えてみると

窮地に一生

何度も体験したことだろう

不思議な姉妹

母は兄が亡くなつていても
仏壇には5分と座らなかつた
しかし6年間

陰膳お供えすることはやめなかつた
それを長女の私がいただくのが務めだつた
そして珍しいものも
畠でできた初物も
なんでもお供えする

そして

ありがとうございます と一念唱える
ありがとうございます
感謝の一念はねどんなに忙しくても
朝晩できる

そう教えた

しかし同じ姉妹なのに
叔母は神様の祝詞に始まり
仏壇に向かい

1時間もかけてお経を読む
お観音様とお地蔵様に
般若心経を3回唱え

それを朝夕欠かさないで繰り返す
私は素晴らしいお経も
大事かもしれないが

母の教えた感謝の1念に

勝るものはないと思つてゐる

体験は宝「隨筆」

昔 お嬢さんから

原爆のため農家の居候になつた

お家を焼かれ 大好きなお兄ちゃんを奪われ
戦争を憎んだ 原爆を憎んだ アメリカも憎んだ

外人さんを見ると腹が立つた

父ちゃん母ちゃん ハングリ ハングリ

言つたらチヨコレイトくれるよ

そう言つてアメリカ兵を追いかける

子供たちまで憎かつた

母も憎んだことがある

確かに優しい時もあつた

厳しい時 それでも母がいたから耐えられた

生き運が強く15時間で目が覚めた

学校にも行けず

たつた一人で8日間のかかる北海道に預けられ

自殺未遂もした

しかし助けられてしまつた

生き運が強く15時間で目が覚めた

神棚の前で目を覚ました

生きていた事を恨んだ

樂になりたかつたのに

3年過ぎてもほつておく母が許せなかつた

子どもを産んだことのない

叔母の仕打ちも許せない

二人を抗議するための自殺なのに
失敗に終わつた

悔しくつて 悔しくつて たまらなかつた
完敗した気分

気がついて うーん と唸り声をあげた
私の寝床に叔母が飛んできた

手のひらで私のほほを両びんた
首は紫にはれ上がり

右も左も向けない 無抵抗のまま

この罰あたり女が

一つしかない命 何を考えてる
抱えるようにおこし

軍隊のつなぎの服を着せ

2重の玄関から 雪の上に突き飛ばされた
身動きできないでいる私に
今度はバケツが2つ飛んできた

冷たい雪に両手をついて
起き上がるうとすると

そこへ天秤棒が飛んできた
当時どこの農家にも水道がなく
井戸であつた

しかし浅い井戸は役に立たない
凍りついて

沢の脇水は真冬でも凍らない

家庭の水も
家畜の水も

そこから人力きで担ぐしかない
命を祖末に考えた罰だ

一人で全部汲みなさい

長靴に縄を縛り滑り止めにして
天秤棒にバケツを引っ掛けで
首が動かないまま沢に下りる

涙が滝のように流れる

悔しさと 憎しみと 情けなさと

生き残った事が恨めしく

目から鼻から 口で止めるどころか
顎から流れ落ちる

止めても止めても 止まらない
首が痛いのに ヒヤツくりまで

その時始めて

体中の水分が全部流れていくような

涙を流した

3年4ヶ月

私はやつと叔母から逃げて

中標津中学校のそばにある交番に逃げ込んだ
母に帰りたいと連絡をしてもらい

当時8000円送つてもらつた

私はそれで広島に帰る事が出来た

帰ると決まつた日

叔母は私の前でお行儀をして
向かいあつて話し始めた

姉は本当に幸せ者だ4人の子供に恵まれて
1人ぐらい いやおまえがほしかつた

それは叶わないんだね

広枝 私は決しておまえが憎かつたのではない
私の命は3年と言われた

3年間でおまえを一人前にしたかつた

私の財産はすべておまえのものなんだよ

確かに馬は品評会で1等賞2等賞が何頭もいて
1等100万の値がついていた

私は叔母に言つた

叔母さんのものはなんにもいらない
1つのおもちを たとえ6つに分けて食べようと
お母さんと一緒にいたい

それなら何を言つても無駄だね
でもおまえは本当によく辛抱してくれた

今のおまえなら

たとえ農家に いやどこへ行つても大丈夫

私はこの3年間本当に幸せだつた

おまえとの生活は本当に楽しかつたよ

私は心の中で 嘘 と思つていた

広島へ帰つても家を1軒立てるのは大変だよ
ここはおまえの物になる

そんな言葉も私には聞こえない

いいや 私は自分の力で立ててみせる
どうか

でも私はおまえの家には玄関からは入れない
家を建てたら

トイレの窓を1センチ開けておいてくれないか
ばかばかしい

と思つたが私は返事をしなかつた

馬橇の支度をして

手伝いのおじさんが

駅まで送つてくれる事になつた

叔母が手縫いで縫つてくれた

紺の服 上下

それだけを手土産にもらひ

あとの荷物は汽車でおじさんが贈つてくれた

中身なんか私にはまったく興味がなかつた

馬橇に毛布を敷いて 湯たんぽを入れて

おむすびと水筒を持たせ

リックサックに道中で食べられる物を詰め込んで

一緒に馬橇に乗り込んだ

てつきり中標津駅まで送つてくれるのか

と思い無言で座つていた

中標津の飛行場

滑走路まで来ると馬をとめた

隠しきれない涙の顔をあげて

私はここで別れるよ

本当に今までありがとう

お前はどこへ行つても

もう恥をかくことはないよ

よく頑張ったね

姉さんによろしくと伝えてくれ

おまえに最後のお願いがある

一度でいいお母さんと呼んでくれないか

私はいきなりで冗談でしょと思つた

私の母は世界中探しても

広島にいるお母さん ただ一人よ

おじさんが馬櫈を出した
叔母は馬櫈に手をかけて

私に追いすがつた

その手を振り切つて

私は後ろを振り向かず帰途についた

今もその姿が私の脳裏に残つてゐる

それから2ヶ月後

叔母はこの世を去つた

その時始めて叔母のために涙を流した

当時お金もないのに母だけがお葬式に行つた

私はその時できれば

今一度叔母の顔お見たいと思つた

しかし旅費もできず

ただ夜空の星に手を合わせた

私はいま75歳

14歳から17歳までの

遠い思い出なのに

昨日のようにはつきりとよみがえる

母を叔母を憎んで恨んで
悔し涙を流した事が

この身に刻みこまれてる

私はあの時があつたからこそ
本当の苦しみを知つた

耐えぬく力をもらつた

物事に挑戦する勇気も根性ももらつた
よくもあそこまで鍛えてくれました

今は感謝の気持ちでいっぱいです

母が教えてくれた

体験は誰にも取られない

お前だけの宝だと

今はつつきりとそう思う

子どもを持つなかつた叔母

今なら お母さん と呼んであげたい
母にも叔母さんにも育ての母として

二人の母に感謝をこめて

ありがとう

大空に向かつて力の限り叫びたい

本当に 本当に ありがとう

叔母は信仰家で

仏様にお参りするときは衣に着替える人だつた
私もお参りするとき 3年間それを着せられていた

門前の小僧習わぬ教を読むと言うが
私は毎日仏壇には浄土宗のお経を

お観音様とお地蔵様には般若心経を唱えさせられた

朝3時起床 お参りを済ませ

馬に飼い葉を与え 牛にえさをやり

糞をかたづけて 乳を縛り沢に冷やして

いつも7時頃になる

そこで初めてストーブに当たることもできるし
朝食にありつける

ここで私はいろんな事を学ぶことができた
この3年間を語れば

とてもとても語りつくせないが

この体ははつきりを覚えてる

さみしさに涙

私はいろんな目にあつたせいなのだろうか
いつからか勝気な子と呼ばれていた
確かに負けず嫌いになつていたと思う
我慢強かつたとも思う

13歳まで育つた広島の母のもとから離れ
最北の北国

根室国中標津の叔母に預けられた
私は母が恋しくつてセンチメンタルになつた
夜空の星を見ても

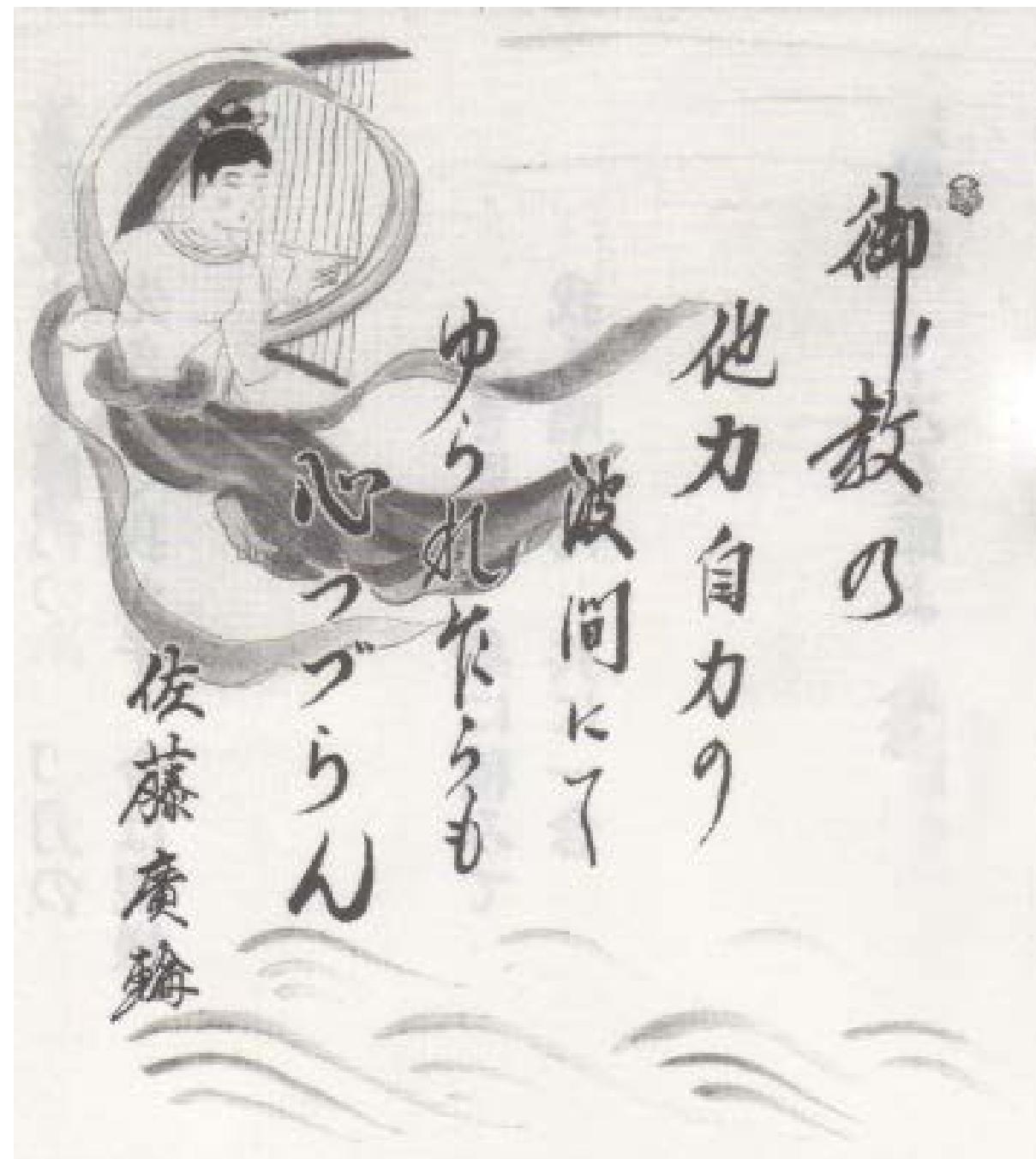
お月さまを見ても
涙を流した日々があつた

今もある日の

おかげば頭の私の顔が見える



佐藤 康輔



第六章 四十八句集

春

松に目出だしたくまと
は根張りの忍耐か
桃梅を和てやさしさと
育生じてひなまつり
桜一枝心に咲かせ
歓喜感謝の花がらと
重ねよ人生春爛漫

佐藤廣輔

あるがまんま そのまんま 感ずるまんま
心のまんま 四苦八苦を詠んでみる。

幸いなことが一つある。学もなし、財もなし、名譽も
誇りも、すべてなし。無い無いづくしは気が楽で、思
いのまんま生きられる。

母が教えてくれました。

宇宙の大自然のその中で、言葉をもらつた人の世に生
まれたことを感謝しろ、感謝に生まれる情熱で世間の
荒波越えて行け、人に生まれたよろこびを、しつかり
しつかりかみしめて、真っ赤に燃える西空へ帰つて来
いと言つていた。

☆ ひざまづく 仏の慈悲に いだかれて
 我は唱えん 謝して一念

☆ 御仏の 慈悲にすがれば いとやすし
 自力の心 捨ててさわやか

☆ 羽衣を まといて誓う この一念
 共に唱えん 共に歩まん

☆ 御仏の 慈悲深さを 身に積めば

天高くして 星は輝く

☆ 捨て難し 自力の心 振り捨てる
親の導き 信すればこそ

☆ この時の 恵みにひたすら 手を合わし
与えられたる 道を一途

☆ 罪深き 己を責める ことよりも
慈悲にすがりて 感謝一念

☆ 昇る日に 命つくるも 惜しみなく
今を限りと 咎くや朝顔

☆ 月を見て ほほを伝わる ひとしづく
母よ恋しと 永遠の別れよ

☆ 人生の 山坂越える 力とは

命もやせる 道に立つこと

☆ 阿陀たのむ 荒れて狂いし 心田に

黄金にみのる稻の一株

☆ 御身足を 血潮にそめし 御教えに

我は続かん 共と手をとり

☆ 黒衣を まといて悟る お念佛

この一衣こそ 我が命なり

☆ 仰ぎ見る 日越の紅葉 美しく

こけむし萌ゆる 静かなる寺

☆ 人の世に 生まれしことを よろこびて

語りつくして 唱いつくして

☆

我が子等を 育てて いると 思いきや
育てられる 今日のこの身よ

☆ さずかりし 今日の命 よろこびて
語りつくすや 親の恩愛

☆ サボテンの 花に重なる お母影に
ひとり語るや 今の出来事

☆ 雲海の 上に昇る 陽をあびて
心しづかな 山のいただき

☆ 時を過て 嵐を越し 一輪の
花に水さす 他力念仏

☆ 御教えの 本願他力の お念仏
唱えれば涙 涙こぼるる

☆

北国の 空にひとすじ がんの群れ

鳴く声悲し 母よ恋しい

この経こそぞ 衆生の唱宴

☆ 親鸞の 早乙女節よ 錦織寺

☆ 二方の 深き恩愛 身に積みて
 我も唱えん 共に一念

☆ 御慈悲よ 本願他力の 御念仏
 先き亡く我が子 今は親様

☆ 御教えの 他力自力の 波問にて
 ゆられながらも 心つづらん
 悟るとも 悟らせるとも 出来ぬれど
 我は唱える 親の念仏

☆ 我が心 迷いきまよう おろかさを

この一念に この一念に

☆ 今悟る 花の盛りを うぬぼれて
うかれ桜の むなしき日々を

☆ 我ここに 深き御教え 語るには
舌足らずなり されど一念

☆ 積る雪 凍つく空に 親を呼ぶ
涙に暮れた 十代の日々

☆ まごの顔 目を細めつつ すこやかに
命もやせと 愛の念仏

☆ 暗闇を 手さぐる時の おそろしさ
打ち消すべは 我の念仏

☆

親の道 親いて歩く 日をあびて
己れに生きて 閨にさまよう

☆

ありがとう かすれ消えゆく 母の声
ほぼすりむせぶ 永遠の別れに

☆

濁流に のまれし命 さずかりて
何と受けるや 何と生きるや

☆

ありのまま 衆生の命 愛しいと
抱いて下さる 大きな慈悲よ

☆

起き上がる 涙の日々よ ありがとう
命輝け 生きて輝け

☆ 人の世に 友なきことは 死に等し
友ありてこそ 命輝く

☆ 御教えの 本願他力 お念佛

この一念なり この一念こそ

☆ 連れられて 親鸞様の 足跡を
たどる旅路に 涙こぼるる

☆ 我が心 迷いにゆられ 弱きもの
一念に伏し 一念に立つ

☆ おさな子よ 親の愛こそ 無償なり
心に受けよ 受けて一念

☆ 御教えの 久遠の光 身に受ける
我のゆく道 我決めてこそ

☆ 我が命 凍てつく暗に 沈めるも
生きる仕打ちを いかにたえるや

☆ 今悟る 親なればこそ きびしくも
しかりさとすも 大きな愛と

☆ 暗闇に 立木さくよな 鳥の声

恐怖に暮れた 過去の思い出

☆ 若小馬の はしやぐ姿よ 空青く

土の香りに 夢もふくらむ

私は人生でどん底の思いをしました。バブルがはじけ、その波に乗り遅れた。自分も始めて体調不良を覚えました。未破裂脳動脈瘤 9ミリが見つかり、仕事がうまくいかないうえに、頭痛や高血圧と最悪。手術を受ける勇気もない。その上、弟が癌の宣告。既に手遅れの状態。もうどうするすべも見当たらないが、弟を励ましながら心を決めた。もう2人とも亡き母にすがるしかなかつた。「同じ母から生まれたことを感謝しよう。そして頑張りぬいて、母さんただいま、そう言おう。」と。

叔母が教えた経を唱えたくなつた。しかし万が一弟が先に行つたら、私の経で母のもとへ還してやりたい。その一心で浄土真宗木部派の本山錦織寺で得度を受け、3年の通信教育を受け、経を正式に覚えた。

3年間弟は生き抜いてくれた。私は自宅葬で見送った。その後3日間水だけで四苦八苦、48句を読んだ。きっかけは経典の裏にあつた親鸞聖人の詩でした。

あちらなる 越後の山に 行き疲れ
足も血潮に 染めしばかりぞ

この一詩に涙した私は、涙が枯れたとき一つの光を見つけました。

法名 廣輪



あとがき

私の人生の出来事を本にできました。このことは何事にも変えられない喜びです。今亡き広島経済大学の専務理事 川村毅先生のお力添えと、森本順子先生が子供を諭すように5年の歳月をかけて私を育ててくださつたおかげです。その上、本当に多くの方々のご厚情に支えられましたこと深く感謝します。

困難な状況に直面しながらも、ぶれないと自分の信じる道を歩くことができましたのも皆様方のお陰です。本当にありがとうございます。

何よりも嬉しいことは、孫の目に触れ、孫の手で編集してくれた事。私はにとつては、人間として生まれた、最高の喜びを感じています。

孫が手助けしてくれ、わずかひと月で完成させてくれた。嫁にもありがとうございます。
この本は親子三代の心の絆で完成しました。一つでも共感していただければこれに勝る幸せはありません。感謝。

菜の花のよう

2014年3月 初版第一刷発行

著者 佐藤 廣枝

編集 佐藤 菜笑

佐藤 敏子

佐藤 廣枝